



分娩時の注意点

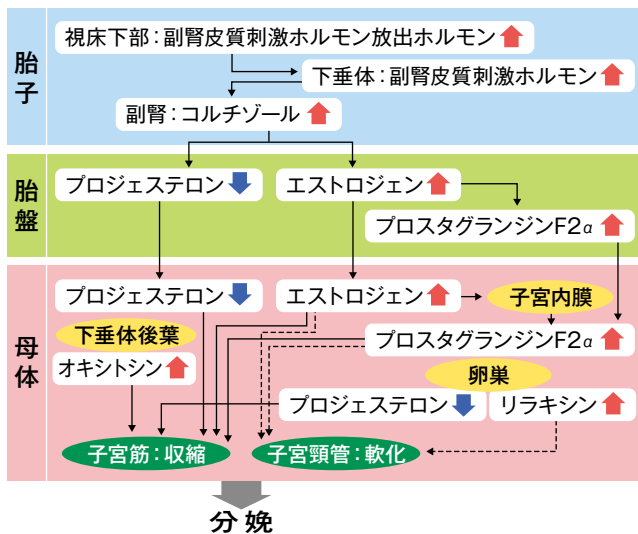
～娩出時間と死産

「くみあい養豚生産管理システム (PICS)」の集計結果によると、1 腹当たりの正常産子数は増加しているものの、死産率が増加している (2003 年 9.57% に対し、2010 年 10.81%)。今回は分娩時に気をつけたいことについて考えてみたい。

● 通常妊娠時の分娩の流れ

分娩は母豚と胎子にとって非常に大きな仕事である。通常妊娠 113 ~ 116 日で到来する分娩は、胎子と母豚の両方のホルモン作用により進む (図 1)。また、分娩が近づくと妊娠豚には外見的にも外陰部の発赤腫脹や乳房の発達肥大 (乳頭を押すと乳汁が漏出) などの変化が現れる。分娩は開口期 (陣痛開始、胎膜の破水)、産出期 (羊膜の破水、胎子の娩出)、後産期 (後産の排出) に分けられる。

図 1：分娩の機構 (ホルモンの動き)



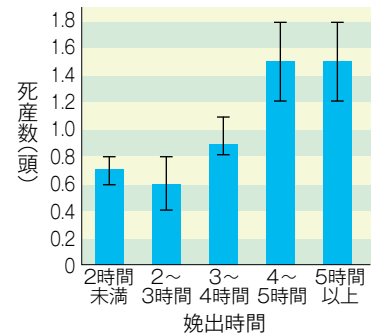
● 娩出時間と注意点

豚の分娩は行動学上、夕方から夜間に行われる傾向があるといわれる。その時間帯は静寂で分娩を誘起するオキシトシンの分泌を抑制していたアドレナリンの分泌が低下するためである。昼間分娩する母豚のために、分娩舎内はできるだけ静かにすることがよいと考えられる。

分娩の産出期に入ってから最後の胎子が娩出されるまでの所要時間は個体によって差があるが、通常 3 時間程度である (例えば 10 頭の胎子なら 18 分間隔で生まれてくる)。子宮内にある胎子の数が多くなれば、全頭の娩出にかかる時間も長くなる。娩出時間が長くなると、後半に生まれてくる子豚が酸欠状態に陥り、死産となる可

能性が高まる。娩出時間が長くなると死産率が高くなる。娩出時間が長くなる要因には産子数だけでなく、産道異常 (骨盤の未発達、頸管の狭窄)、微弱陣痛、胎子過大など、いわゆる難産もあげられるため、そのような母豚はよく確認する必要がある。

図 2：娩出時間が死産数に及ぼす影響



今枝紀明ら、岐阜県畜産研究所 (2004) 改変

● 分娩時間の短縮

分娩に立ち会うことで死産や圧死の数を減らすことが期待できる。昼間に分娩を集中させることを目的に分娩時間を人為的に調節する方法はすでに行われている。プロスタグランジン F 2 α の投与による分娩誘起では、分娩予定日の前日朝に投与することで分娩日の日中に分娩させることができる。娩出間隔が長くなったときや陣痛微弱の場合の娩出促進では、母豚の下腹部マッサージやオキシトシンの投与が行われている (正常な分娩の場合には使用しない)。

今後、生産性向上や種豚改良により産子数が増加してくると、分娩時間が長くなっていくことが考えられる。1 頭でも子豚を無駄にしないために、今一度、母豚に負担をかけない分娩管理を見直してほしい。



下腹部マッサージ



正常な分娩産子。臍帯を自力で切って初乳を飲みに行く。爪先が丸く、母豚の産道を傷つけないようになっている